

平安神宮と京都の復興

平安神宮は、1868年以降におきた東京への遷都に伴い衰退した京都復興の象徴です。平安神宮の建設は、経済の促進と成長、古都としての歴史を讃える事を意図とした、複数の大規模なプロジェクトの一つでした。

794年の奈良からの遷都により、京都は当初、平安京として始まりました。明治時代（1868～1912）に東京が首都となるまで、千年以上にわたり天皇の居住地であり続けましたが、東京への遷都と同時に平安京は京都と改称されました。

江戸時代（1603～1867）から明治時代（1868～1912）への移行は社会的・政治的混乱を伴いました。明治維新と東京への朝廷の移転は、京都の経済を著しく弱体化させました。

1870年代、政府は市に財政支援を行い、新産業の促進と、復興を奨励しました。鍵となるプロジェクトの一つが、近隣の滋賀県にある琵琶湖と京都を繋ぐ、琵琶湖疎水の建設でした。1890年の琵琶湖疎水の完成によって電力発電が可能となり、また、物資を船で輸送できるようになりました。これにより京都の新産業の発展や、水力発電所が開業し、市電や工場に電力を供給されるようになりました。

市は博覧会や見本市を開催し、1895年には最大規模の第四回内国勧業博覧会が開催されました。企業は新技術の実演を行い、市内には京都駅とイベント会場を結び、来訪者を運ぶ路面電車が開通しました。博覧会会場の近くには、平安神宮と現在四つあるうちの二つの神苑も同年に建設、公開されました。

平安神宮は京都復興の永続的な象徴であり、千年の都として市の遺産を讃えるるものです。